Ⅲ．学部教育教材ビデオ制作の各段階

－「有形民俗資料の展示」の場合－

福井　康雄

1．はじめに

個人作業となることの多い、論文作成などとは異なって、映像制作の場合には、企画→シナリオ→撮影→編集→録音といった作業の進行していく各段階で、数多くの人々が参加して、集団で作業を進めることが大きな特徴の一つとなっている。

したがって、教材の基盤となる制作意図を忠実にフォローして、初期の目的を果たしていくためには、中心となる制作者が、その制作の各段階で作業に関わってくる多くの人々と、いかに意志の疎通を図り、その力を作品の完成にむけて結集していくかが大きな課題になってくる。

横一列に並んだ人々が、あるフレーズを順繰りに耳打ちしていき、最後に、そのフレーズがどれほど変化したかを比べるという「言葉の伝達ゲーム」があるが、映像制作の場合でも、各作業の場での意思の統一と、次の作業段階へのそのフォローをきちんと行っておかないと、伝達ゲームの場合のように、当初の意図（言葉）が、人々の間を流れていくうちに、しだいに歪んでいき、結果として制作意図とは大きく掛け離れたものともなりかねない。

では、映像制作の各段階で、当初の制作意図を出来るだけ的確に反映させ、作業を、より効果的に進めていくためには、具体的に、どのようにことに留意していったらよいのだろうか？

この稿では、平成６年度の学部教育教材ビデオ・博物館学芸員の仕事「有形民俗資料の展示」の制作事例を一つのサンプルとしてとりあげる。そして、その企画から完成に至るまでの各段階の作業を振り返り、そこでは、制作活動が具体的にはどのように行われたかを、実例に基づいて一つ一つ検証しながら、映像制作における意思統一や意思伝達の問題について考えてみることとした。

2．第一段階［企画の立案］

平成５年度に制作の始まった、学部教育教材ビデオ「博物館学芸員の仕事シリーズ」は、当該年度に、武蔵野美術大学を舞台とした、有形民俗資料編の＜調査と収集＞、＜資料整理＞の２巻を完成させ、平成６年度に入って、埼玉県民俗文化センターを舞台とした、無形民俗資料編の＜調査と記録＞、＜整理と保管＞、＜民俗芸能の展示＞の３巻の制作にとりかかった。

この「有形民俗資料の展示」は、平成５年度に制作された有形民俗資料編の２巻と併せて全３巻のシリーズを構成するもので、本来、平成５年度に制作されるべきであったが、諸般の事情により、平成６年度の中途から、無形民俗資料編と並行する形で、急遽、追加制作することになったものである。制作の決定が大幅に遅れたため、なによりも、まず、予定期間内に撮影可能な、適当な博物館が見つかるかどうかが懸念されたが、幸い、平成６年11月19

日から「父ちゃん母ちゃんが子供だった頃　昭和30年代－水郷の風景」といったテーマで、企画展示を予定している千葉県立大利根博物館の協力が得られることとなり、早速、企画立案のための下調査を行うこととなった。

平成６年９月22日に、モデルとなる大利根博物館側との第一回の打合せ行い、まず、展示の企画から完成・公開に至るまでの流れをフォローしながら、映像化可能な素材のピックアップの作業を進めたが、その際、大きな問題となったのが、既に、作業の終了している部分を、どう映像で表現していくかということであった。

この度、テーマとする企画展示の準備は、５年も前から始められているもので、本年度に入ってからでも、展示の流れを紹介する上では、欠かすことの出来ない重要な作業のいくつかが既に完了している。これから、11月の公開までの３カ月の間に撮影される映像だけで、博物館における展示の全体像を表現することは、到底、不可能なことであろう。

この問題も含めて、研究担当のチーム内で検討を進め、既に、終了している部分の映像については、回想という形で、不自然のない範囲で再現することとし、それを、関係者の解説などで補っていくという方針のもとにまとめたのが、以下の企画案である。

○企画案・骨子

①プロローグ
　・大利根博物館周辺のスケッチ
②博物館の展示とは？
　・田村教授の話（館内の展示物を示しつつ…）
③博物館展示の計画と準備
　・展示準備のための会議を行う学芸員達
　・館長の話（企画のいきさつから現在に至るまでの経過…）
　・回想（収蔵庫の調査、野外の調査、アンケート整理、図録の編集）
④展示の計画と準備
　・担当の小林学芸員の話（展示の構想について、イラストを示しつつ…）
　・展示の準備状況（展示物の搬入・展示作業）
⑤他の博物館の事例
　・千葉県立安房博物館
　・千葉県立房総の村
⑥エピローグ
　・田村教授の“まとめ”の話

この企画案では、まず、①で、プロローグとして、大利根博物館の位置づけを明確にし、次に、③～④で、展示テーマの設定から完成までの流れを忠実に追い、展示に関わる学芸員達の仕事の内容を、出来るだけ具体的に浮かび上がらせようとした。そして、⑤で、他の館の展示例のいくつかを紹介して、内容の一般化を図り、さらに、②・⑥での講師の解説を設

定することによって、映像では描けなかった部分への意味付けを行おうとした。このように、多角的な映像素材を揃えることによって、極めて限られた条件下ではあるが、ある程度までは、博物館学芸員の「展示の仕事」の核心に迫れるのではないかというのが、企画者達の当初の“ねらい”であった。

こうして、まず、研究担当者のグループ内で、企画案の骨子を固めたところで、これをタタキ台とした、客員教官や研究協力者で構成される研究会での企画検討へと移った。

3．第二段階［企画検討→シナリオ作成］

○研究会（企画内容の検討）

日時：平成６年10月６日（木）	
場所：放送大学学園東京連絡所	
出席：客員教官	（朝岡康二・国立歴史民俗博物館教授、田辺悟・横須賀市立博物館館長、松崎憲三・成城大学助教授、山口徹・神奈川大学教授）
研究協力者	（栗本佳弘・千葉県立大利根博物館館長、小林稔・千葉県立大利根博物館学芸員）
共同研究員	（高安克巳・鳥取大学教授）
センター教官	（川島淳一、福井康雄、須藤護）

博物館の仕事に通じた、各方面の専門家によって構成された研究会では、実に、さまざまな角度から、企画案への意見が寄せられた。そして、それらの意見は、集約してみると、大凡、「展示は、学芸員の日常の調査研究活動の成果である－という観点に立って、調査研究とのかかわりを中心とした展示の姿を描くべき…」といった点に絞られた。この他、出された意見の中には、「第一次案では、展示の作業は分かるが、仕事の内容が見えてこない」といったものもあったが、確かに、学芸員の展示の仕事を描く教材だとすれば、ルーティン化された作業の手順といった技術的な側面ばかりではなく、なぜ、そのような展示に至ったかという、学芸員が、展示を構成していくソフト作りの中身にまで立ち至った表現が必要になってくるだろう。

しかし、研究活動の成果としての展示なり、展示のソフト作りの過程なりを描くことの重要性は確かだとしても、それらは、多くの場合、目に見えない、頭の中の作業になることが多いだけに、映像化するには、きわめて難しい素材であることも、また、事実である。

限られた期間の中で、展示の仕事のソフト面を、出来るだけ具体的な“絵”にしていくにはどうすればよいか？

研究担当者のグループでは、企画会議の後、再度、撮影対象の大利根博物館側を訪問するなどして調査を深め、細部にわたって撮影素材の検討を行った結果、以下のようなシナリオにまとめていった。

○シナリオ決定稿・骨子

①プロローグ
・大利根博物館周辺のスケッチ
（利根川の流れ、水郷風景…など。）
②博物館の展示とは？
・田村教授の話（館内展示物を示しつつ…博物館展示の意義を語る。）
③博物館展示の計画と準備
・準備を進める担当学芸員達
・館長の話（諸資料を示しつつ…大利根博における研究活動の流れと、展示活動のこれまでの経過を語る。）
・小林学芸員の話（回想を交えて…今回の企画展示の作業工程、収蔵庫の調査、野外の調査、写真の選定、アンケートの集計、図録の編集など。）
④展示の実施計画と実際
・小林学芸員の話（資料等を交えつつ…展示計画書、展示物の搬入、開梱作業、補修作業、設置作業、完成した展示など。）
⑤田村教授の話（調査研究活動の発表の場としての展示の重要さ、博物館の生涯学習施設としての意味合い…など。）

シナリオが、企画案と最も大きく異なるのは、まず、企画案の⑤の「他の博物館の事例」を割愛して、撮影場所を、大利根博物館だけに限って構成することにしたことである。シーンの⑤は、博物館の展示活動を一般化するために入れたものだが、調査研究活動の延長線上にある展示活動といった側面をクローズアップするとすれば、「展示の計画や準備」、あるいは、「実施の実際」といった点に、より描写の中心を置かねばならず、様々な事例を入れて、総花的で平板なものにするよりは、その時間を、一つの事例を奥深く描くことに当て、そこから、普遍的なテーマを引き出していくべきではないかと考えた結果である。

また、調査研究活動と展示との関わりを強調するための方法として、この他に、シーン③の館長の話の中で、企画案では、展示活動の流れだけを説明していたものに加えて、その前提である、大利根博の研究活動の流れについても触れてもらうこととし、さらに、冒頭の田村教授の話の中でも、研究活動と展示との結びつきについて、特に、話を付け加えて戴くこととした。

先述したように、技術の解説などと違って、内面的なソフト活動の部分は、きわめて、画像に捕らえにくい部分である。シナリオ段階の処置としては、上記のように改編したが、それが、説得力のあるものとなるかどうかは、次の、演出・撮影段階の作業に負うところが大きくなることは言うまでもない。次の実際の制作段階に、課題の多くを残しながら、シナリオの決定を見た次第である。

4．第三段階［撮影→粗編集］

出来上がったシナリオに基づいて、直ちに、演出の担当者との打ち合わせに入った。そし

て、演出者とともに大利根博物館を再訪し、撮影現場を下見し、博物館側の担当者の意見も聞きながら、シナリオの内容を、さらに具体的に固めた上で、以下のようなスケジュールのもとに撮影に入った。

○撮影スケジュール

☆第一次ロケーション（平成６年11月16日～17日）
（主な内容）
①プロローグ
・博物館周辺のスケッチ
③博物館展示の計画と準備
・館長の話（調査研究活動の流れ）
・調査研究報告書
・展示会関係資料
・農家での学芸員の補足品調査
④展示実施計画と実際
・農家からの展示資料の積み出し
・搬入資料の館内での開梱・補修・燻蒸・設置
☆第二次ロケーション（平成６年11月28日～29日）
②博物館の展示とは？
・常設展示室の展示
・田村教授の話（展示の意味と目的について）
③博物館展示の計画と準備
・学芸員たちの打合わせ風景
・収蔵庫の資料
・担当学芸員の話（展示計画の立案から完成まで）
・学芸員の館内作業（収蔵品確認・写真選定・アンケート整理・図録編集）
④展示の実施計画と実際
・展示計画の検討とその内容
⑤エピローグ
・田村教授の話（まとめ）

撮影内容は、かなり多量であったが、幸い、博物館側の全面的な協力を得られたこともあって、延べ４日間の日程の中で、ほぼ、予定通りの作業を終えることが出来た。そして、当初の打ち合わせ通り、演出担当者によって、撮影素材をラフに編集してもらい、それを研究者側で検討することとした。

仕上がった粗編集段階のテープは約34分。大体、シナリオの順序に従ってつながれたものであったが、研究者側の検討の結果、シーン①「プロローグ」の博物館周辺のスケッチの場面、シーン②「博物館の展示とは？」の常設展示室の場面、シーン④「展示の実施計画と実

際」の完成した企画展示室の場面等々、いくつかの映像が、教材ビデオとしての当初の“ねらい”とかなりズレているということになり、再編集をしてもらうこととなった。

本ビデオは、あくまでも、大学の学部で教材として利用することを前提として制作されるものである。従って、個々の映像の優劣もさることながら、まず第一に、シーンとしてまとめられた映像の流れが、教材としての“ねらい”を果たしているかどうかが問われることになる。この点については、シナリオ完成の段階から、演出担当者とも打合わせを重ねて、当ビデオの“ねらい”を十分に説明した筈であったが、特に、上記の三つのシーンでは、大きなズレが出ることとなった。例えば、そのズレが、具体的にどのようなものであったかをシーン①「プロローグ」の場合を例に示すと以下のようになる。

○シーン①「プロローグ」の画面構成

シナリオの設定	一回目の編集構成画面	最終的な構成画面
○大利根博物館周辺スケッチ		
	［カット番号］	［カット番号］
・利根川の流れ	①利根川の流れ（全景）	①川と町並みと田圃・鳥瞰パン
	②きらめく川面	
	③川の中の生簀	②田圃と集落・遠望A
・川辺に広がる田園	④石垣からズームバックして高台の家・全景	③　〃　B
・点在する農家のたたずまい		④利根川の全景
	⑤家の庭の植木	⑤川面から集落へパン
水郷自然景観と農村のようすを概観したところで－	⑥再び、家の全景	⑥集落の遠望A
	⑦土手の上から見た農村の家並み・車中から移動	⑦　〃　B
◎スーパー（博物館位置図）	⑧田園地帯をパンして博物館へ	⑧田園地帯をパンして博物館へ
○博物館・外景	⑨博物館全景	⑨博物館全景

シナリオをもとに撮影した素材で、検討用としてまとめられたのが、真ん中の「一回目の編集構成画面」だが、まず企画者側が、違和感を覚えたのは、シーンの全体が、きわめて視野の狭いカットのみによって構成されているということである。表を見ても分かるとおり、①から⑥までの全てが、川・田圃・集落などを単体で表現する視野の狭いカットであり、地域全体の位置関係を一望出来るようなマクロな視点をもったカットに欠けている。⑦のカットは、かろうじて田圃と集落とを、土手の上からとらえたものだが、これも、移動する自動車の中から撮影したもので、落ち着いて、その地域のパースペクティブを認識出来るようなものではなかった。

左端に示してあるのが、シナリオの該当部分だが、その“ねらい”は、まず、作品の冒頭で、利根川周辺の水郷地帯の自然と暮らしの特徴をスケッチし、「利根川の自然と歴史」を基本テーマとする大利根博物館の位置付けを明確にしておこうということであった。このファ

ーストシーンで、大利根博物館の存在の意味合いが、きちんと把握出来ていれば、その後に出てくる同館での展示の計画や準備、あるいは、展示そのものの内容なども、全体的な視野に立って、有機的なつながりを持ってとらえることが出来るであろう。従って、このシーンは、単に、作品の世界に入り易くするイントロの役割ばかりでなく、本編全体のポイントともなる、かなり重要なシーンとなるべきであろうというのが、企画者側の、このシーンに対する基本的な考え方であった。

①～⑥のような視野の狭いカットも、使い方によっては、大きな力を発揮する映像だが、この度のように、事実関係を、教材として出来るだけ客観的に提示したいシーンの場合、それのみを繋げただけでは、水郷のムードは伝わるとしても、水郷地帯の全体像は、きわめてとらえにくい。同様の、比較的視野の狭いカットを中心としたムードに片寄った編集処理は、シーン②及びシーン④の展示室の場面にも見られ、今回のように、展示制作過程を客観的に描かなければならない教材映像には不適当と思われたため、シーン①の場面とともに、演出者側に何回か再編集を求めることとなった。しかし、撮影以前のシナリオの段階で、その解釈に基本的なズレがあったため、編集しようにも、そのつもりで撮っていないので、肝心の映像素材に欠けるということになり、最終的には、シナリオの“ねらい”を実現するために、再度、シーン①、②、④のシーンを、出来るだけ視野の広い画面を中心に、撮り足ししようということになった。そして、平成７年１月27日～28日の２日間にわたって補足撮影を行い、必要な画面を得た上で、最終的な編集を行い、了解点に達することが出来たものである。

（因みに、表の右端が、最終的に決着したシーン①「プロローグ」の画面構成であり、その内のカットの①から⑦までが、再撮影で得た新しい画面である。カット①、②、③で、広い視野から水郷地帯の全体像を把握し、更に、カット④、⑤で川と集落との関係を描くことにより、水郷地帯の地理的なイメージを、より客観的に、立体的に構成することが出来た。また、他の、シーン②、シーン④の展示室の場面についても、ほとんど、展示品の単体のみの映像で繋がれていた画面に、追加撮影をしたテーマコーナーごとの全体像を加えることにより、展示の特徴を、より分かりやすく表現することが出来た。）

５．第四段階［本編集→録音］

制作プロセスの最終段階にあたる録音・編集の作業は、新年度に入って、以下のような日程で行われた。

○編集・録音スケジュール

☆本編集
平成７年３月２日（木）於　制作棟編集室
３日（金）　〃
６日（月）　〃
☆録音
平成７年３月８日（水）於　制作棟録音室

粗編集の段階で、かなり突っ込んだ意見の交換を行い、作品のイメージについての意志の疎通を図っていたので、本編集での作業は、比較的スムーズに進行した。しかし、録音段階に入ったところで、ナレーションや音楽の処理をめぐって、研究担当グループ内での意見の調整が必要となった。ナレーションや音楽が、必要かどうか？　あるいは、入れるとすれば、どの程度まで入れたらよいか？…という問題である。

もともと、このプロジェクトは、二年がかりで進行しているもので、初年度から、同一の研究担当者、同一のディレクターによって作業が進められてきた。そして、プロジェクト発足時の申し合わせにより、このシリーズでは、ナレーションによる説明では、一方的な意見の押し付けになる恐れがあるという観点から、画面につけるコメントについては、解説者として登場する研究者と、画面の中に登場する出演者のみにするという方針のもとに制作が進められてきた。また、音楽についても、作品の教材性を維持するという意味合いから、前後のクレジットタイトルのバックに流す以外は、極力、使用しないという原則が守られてきた。しかし、前述したように、スケジュールが大幅に遅れたこともなどもあり、6本のシリーズのうち、この「有形民俗資料の展示」編のみが、他のディレクターの担当となり、また、シナリオも新たに参入した研究者の一人が書くような事態となったため、制作開始に当たって、再度、基本方針についての調整会議を行った。

もとより、シリーズ作品であってみれば、一本だけが、その手法において他と大きく異なるスタイルを取ることは、あまり、望ましいことではない。したがって、構成案の作成に当たっても、作品の前後に、専門分野の研究者が登場して解説を行うということと、内容の説明も、極力、実際の学芸員が語ることにするという2点の枠組みを最低の原則として作業が進められた。しかし、こうして、大きな枠組みを決めてシリーズとしての統一をとろうとしたものの、作業が進行して最終の仕上げの段階に入るにつれ、次第に、ナレーションや音楽・効果の扱いなどの点で、他のシリーズ作品との、微妙な制作技法上のズレが明らかとなってきた。これは、もともと、ディレクターをはじめとする制作スタッフが異なるため、あらかじめ予想のされていたことであり、どう軌道修正をするかについても、研究担当グループ内で検討を行った。そして、最終的には、無理に、他のシリーズのスタイルに近づけるよりは、担当スタッフの意図（個性）を尊重すべきではないかということになり、作品の前後の研究者の解説と、出演の学芸員の説明という大枠は守ったものの、ナレーションや音楽・効果の扱いについては、担当スタッフのアイデアをある程度生かした、シリーズの他の作品とは、多少、ニュアンスの異なる教材に仕上がることとなった。

6．まとめ

学部教育教材ビデオ「有形民俗資料の展示」の制作過程をフォローしながら、“制作意図を維持するため、制作の各段階では、スタッフの意思統一や意思伝達が、どのように行われたか？…”を、いくつかの具体的な事例をもとに見つめてきた。

映像制作の場合に限らず、あるプロジェクトが進行する場合、机上の企画と実際との間に、常に、さまざまなギャップが生じるものだが、このプロジェクトでは、特に、従来、ディレクターが一人で行っていた脚本・演出の作業を、ライターとディレクターの分業にするとい

う、新しい試みに挑戦したことなどもあり、制作のいくつかの過程で、軌道修正の作業を行う必要性が生じた。

ディレクターが、構成案やシナリオを書き、それを、自分で映像化していくことは、ある意味では合理的な方法であり、現実に、短編映像の世界などでは、最も、一般的なケースでもある。しかし、ライターとディレクターとの分業方式も、緊密なコンビネーションのもとに、十分な意志の疎通を保って作業が進められた場合には、きわめて有効な方法であり、決して、異例なことではない。特に、短期間で作品を仕上げたり、シリーズで大量の作品をこなさなければならない場合などには、効果的な方法となる。

この度のプロジェクトでは、いくつかの点で、ライター（研究者側）とディレクター側との間に、かなりのズレが出てしまったが、それも、その分業方式の欠陥というわけではなく、初めてのケースで不慣れなためだったとはいえ、この方式で作業を行う場合に不可欠な、両者の意志の疎通にやや欠けていたという点に帰せられるだろう。

勿論、この度のスタッフとは、初めて仕事をすることでもあり、撮影前の打合わせは可能な限り綿密に行った積もりであった。しかし、特に、シナリオの解釈で、一方は客観描写を、そして、他方は多分にムード的な処理を…というように、大きく隔たってしまったのはなぜだろうか？　その要因を振り返ってみれば、一つには、制作が急に決まったため、本来なら、ディレクターにも加わってもらうべき企画会議に出席してもらえなかったことなどの、事前準備の不足といったことがあげられるだろう。研究協力者なども加わって、企画の基本方針を決める企画段階から、ディレクターに参加してもらっていれば、(3)で見たようなシナリオ解釈上の大きな誤解は生じなかったかも知れない。また、あるいは、その要因の一端は、シナリオの書き方にもあったのかも知れない。自分で演出をするシナリオを書く場合には、その書き方も、ある程度、ラフで済むが、それを、第三者に委ねるとなると、“ねらい”が的確に伝わるような、より丁寧な表現を工夫するといったことも必要であったのかも知れない。さらに言えば、今回のディレクターとカメラマンも、初めての付き合いのようであったが、撮影現場での、両者の意志の疎通がどうであったかといったことも、問うてみる必要があるだろう。

関係スタッフの意志統一や意志伝達といったことをポイントに、制作の各段階を振り返ってみた。このプロジェクトでの、スタッフ間の「意志の疎通」はどうであったかと言えば、これまで見てきたように、初めて仕事をするスタッフが多かったせいか、なかなか互いの意図を理解出来ず、いささかの混乱が生じたことは否めない。しかし、制作の進行過程での問題点は、その都度、あいまいに残さず、率直な話し合いをして軌道修正を図った結果、作品の完成度はともかくとして、制作の当初の“ねらい”は、ほぼ果たせたのではないかと考える。

結果として、多くの課題の残されたプロジェクトであったが、作品の制作が、研究開発のためのものであってみれば、これらの課題を引き出すことが出来たことで、一面、意味ある研究プロジェクトになったのではないかとも思う。スタッフ間の「意志の疎通」の問題は、多分に、スタッフ構成の在り方に係わっているが、これからも、教材制作の場合には、どのような制作手法が最適なのかを探るために、従来の方式にこだわらず、スタッフ構成も含め

た、出来るだけ多様な制作形態を試みていくべきだろう。

また、今回、諸般の事情から、シリーズ６本のうちの１本だけが異なった制作スタッフの担当となり、手法的に、他とは多少ニュアンスの異なる仕上がりとなったが、両者の相違がどこにあるのか、そして、その相違は、教室での視聴結果にどのような影響をもたらしたかといったことについても、評価調査の結果などを待って、きちんと継続的に分析し、より利用価値の高い学部教材制作の資料としていきたい。

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事

「有形民俗資料　第三部　展示」

VTR／29分40秒

□　研究組織

—センター教官—

川島　淳一（教授・主査）
福井　康雄（教授・脚本構成担当）
須藤　　護（助教授・制作担当）
芝崎　順司（助手）

—客員教官—

朝岡　康二（国立歴史民俗博物館教授）
倉林　正次（國學院大学教授）
田辺　　悟（横須賀市自然・人文博物館館長）
田村善次郎（武蔵野美術大学教授）
松崎　憲三（成城大学助教授）
山口　　徹（神奈川大学日本常民文化研究所所長）

—研究協力者—

栗本　佳弘（千葉県立大利根博物館館長）
石井　勝也（千葉県立大利根博物館学芸課長）
伊豆　守彦（千葉県立大利根博物館学芸員）
小林　　稔（千葉県立大利根博物館学芸員）
米谷　　博（千葉県立大利根博物館学芸員）

□ 基本資料

題　　名	学部教育教材　博物館学芸員の仕事 「有形民俗資料　第三部　展示」
製　　作	放送教育開発センター（大学共同利用機関）
製作協力	NHKエデュケーショナル
上映時間	29分40秒
原　　版	D―3・2分の1インチテープ
撮　　影	（第一回）平成6年11月16～17日 （第二回）平成6年11月28～29日 （第三回）平成7年1月26～28日
本　編　集	平成7年2月2～3、6日 （於　センター制作棟―VTR編集室）
録音（MA）	平成7年2月8日 （於　センター制作棟―R・Aスタジオ）
完　　成	平成7年3月14日

□ 画面の時間経過

(1) 開始タイトル（40秒）	……40秒
(2) プロローグ（1分22秒）	
・大利根博物館周辺	…… 2分 2秒
(3) 博物館の展示とは？（3分36秒）	
・大利根博物館内部―常設展示室	
・語る田村先生	…… 5分38秒
(4) 博物館展示の計画と準備（8分56秒）	
・展示の計画（館長の話）	…… 9分30秒
・展示の準備（小林学芸員の話）	……14分34秒
(5) 展示の実施計画と実際（12分8秒）	
・実施計画の内容	……18分30秒
・最終段階の準備	……20分20秒
・展示の作業	……23分 9秒
・完成した展示	……26分42秒
(6) エピローグ（1分58秒）	
・田村先生のまとめ	……28分40秒
(7) 終了タイトル（1分）	……29分40秒

○シナリオ

音楽	効果	画面	時間	解説
		1 開始タイトル	(40秒)	
M1		○展示作業を行う学芸員の姿に重ねて― T①W 学部教育教材 博物館学芸員の仕事 T②W 有形民俗資料 第3部展示 T③W 武蔵野美術大学教授 田村善次郎 T④W 千葉県立大利根博物館 館長　栗本佳弘 学芸課長　石井勝也 T⑤W 学芸員　伊豆守彦 小林　稔 米谷　博 (WIPE)	40秒	
		2 プロローグ	(1分22秒)	
M2	鳥の声	○大利根博物館周辺の地勢 ・利根川の流れ（鳥瞰） T⑥W ・佐原市の位置略図 ・川辺に広がる田圃 ・点在する農家のたたずまい ○博物館・外景		**N**「利根川と霞ヶ浦の合流点に広がる水郷地帯。なかでも、利根川・横利根川・常陸利根川に囲まれ、豊かな田園風景の広がるこの一帯は、シマと呼ばれ、水郷の核心部に相当するところである。古来、ここでは、川ときわめて関わりの深い、水郷独自の生活が営まれてきた。 水郷地帯の中心、佐原市の与田浦

			しだいに、その玄関に近づいていって—	2分2秒	に位置して、《利根川の自然と歴史》、《千葉県の農業》をテーマとして昭和54年に生れた千葉県立大利根博物館。そこでの学芸員たちの日々のくらしを追いながら、博物館学芸員の仕事について見ていくことにしよう」
		3	博物館の展示とは？		（3分36秒）
			○博物館・内部 ・第一展示室（自然資料、考古資料、歴史資料等…）から、さらに、奥へと進んでいって—		**田村先生の話**「博物館学芸員の仕事第三部で今回は展示をとりあげます。展示は、博物館の仕事の中でも、最も大事な博物館の顔ともいうべき事柄です。と同時に、それを担う学芸員の仕事の中でも、最もメインになる仕事で、学芸員の日常の調査や研究の成果が、最も端的に現れる最も大事な仕事です。今回、ここで見て戴きます、この大利根博物館は、地域総合博物館といえるような性格をもった博物館で…
			・第二展示室 その一角に立って、語りかける田村先生 T⑦W 武蔵野美術大学教授 田村善次郎		この地域博物館というのは、地域に視点を置いた活動を行っているわけで、学芸員の仕事も、自ずからそれに制約されてくるわけです。それは、どういうことかといいますと、非常に幅の広い知識・教養が要求されてくるわけで、それぞれの学芸員の方々は、自分の専門分野をもっているのですけど…
			・室内の展示物 「利根川の水運」「水郷の稲作」、「利根川の漁法・漁具」		地域博物館の学芸員は、その専門分野を中心としながらも、それだけではすまない他の分野、隣接分野にも目配りをしていかなければならない、非常に学際的な総合的な知識と

			T⑧W 常設展示 ・ふたたび― 語りかける田村先生 T⑨W 企画展示 (WIPE)	5分 38秒	教養を必要とする分野だろうと思います。それが、最もよく現れているのが、地域博物館では、一般的な常設展示ということになろうかと思います。常設展示の場合は、その地域の概観、自然条件、風土条件から、考古、歴史というものが、ざっと概観できるような、しかも、その特徴が見えるようなものが必要になるわけで、そういう展示がなされている。しかもそれは、一人では出来ないわけで、いくつかの分野の学芸員の人々の共同研究、協力が必要になるわけで… これは、企画展示の場合も同じだろうと思うんです。 企画展示というのは、常設展示のある部分を深めたり、あるいは、時々の、その地域の話題性のある問題を取り上げて、展示として構成していくものなのです。では、これから、この館で現在行われております企画展示の過程を見ていきたいと思います。」
		4	博物館展示の計画と準備		(8分56秒)
			○博物館・内部 ・学芸課の室内 館長を囲んで、4人の学芸員が平成6年11月下旬から開かれる企画「父ちゃん母ちゃんが子供だった頃　昭和30年代―水郷の風景―」の打ち合わせを行っている。 T⑩W		**N**「定例の企画会議。 今、行われているのは、企画展示

			展示企画会議 ・会議の片隅 多くの資料を前に語る館長。 T⑪W 千葉県立大利根博物館 館長　栗本佳弘 (WIPE) ○調査研究報告 ○収蔵資料目録 ○展示会写真集 ○展示会ポスター (WIPE) ○収蔵庫 ・農具のコーナー ・漁具のコーナー (WIPE) ○企画展「河童と竜神」のポスター ○企画展「天保水滸伝の世界」の図録	6分 21秒	〈父ちゃん母ちゃんが子供だった頃〉の展示品収集のための検討会。開催が間近に迫った、この企画も、学芸員たちの日頃の研究活動の中から生まれてきたものであった。では、この企画が、どのような経過を経て実現に向かってきたのかを振り返ってみることにしよう」 **館長の話**「当館は、昭和54年の開館です。今年で15年になっています。テーマが、利根川流域の自然と歴史ということで、かならずしも人文系だけでなく、自然も扱うテーマになっています。そういうようなことで、多岐にわたる活動ができます。この歩みの中では… 紀要ですとか、論文ですとか、写真集ですとか、いろいろな形で公開されてきたわけですけど、きわめて大きな博物館イコール展示という捉え方の中で、今までの展示についてご紹介してみたいと思います。過去の主なものを… 拾ってみますと、米作りの技術、農具の歴史、これは稲作とその道具ということで、又、利根川のうつりかわり、今の利根川とほぼ50年前の利根川の移り変わりを紹介すると、又、最近の傾向ですが… 形のないものを展示するケースが非常に多くなりまして、平成３年には〈河童と竜神〉という、やはり利根川に関係するものですが、〈河童と竜神〉ですね、それとか、これは昨年度の展示ですが、〈天保水滸伝の世界〉という笹川の繁蔵と飯岡の助五限というヤクザの出入りを取材した

					ものですが、歴史的に実際にあった事件が、どういう経過を経て芸能あるいは地元の方に、今、残されておるか、話がですね。そういうものを調査してきた経過ですね…
			○特別展「鯰百話」の図録 (WIPE) ・会議室の一角で語る 栗本館長 (WIPE)	9分 30秒	又、今年度につきましては、鯰百話ということで、このテーマは、利根川の鯰という計画だったのですが、鯰をあらゆる方向から紹介してみようということで、生態学的な部分、信仰と申しましょうか、民俗学的な部分ということでやってみました。 こうしまして、今回企画しています《父ちゃん母ちゃんが子供だった頃　昭和30年代－水郷の風景》というようなテーマであるわけですけど、このテーマが、私共の計画に載ったのは、凡そ5年前です」
			○イラストA 展示にいたるまで― ・カメラに語りかける 小林学芸員 T⑫W 学芸員　小林　稔 (民俗担当) ○イラストA 寄ってパン―		**小林学芸員の話**「今回の展示は、長期計画といいまして、5年前に計画が練られました。今回は、30年代の写真が400点ほどあったものですから、写真を展示してみようというのが、そもそもの始まりでした。本来、他の調査の場合ですと、ここに資料がありますけれど、 つかみの調査といわれるものなのですが、この調査をして展示が成り立つかどうかというものなのですが、これでいけるということであれば計画決定されます。これが、家の館の場合ですと、3年くらい前から計画決定されるのですが、この計画決定と言うのは、イメージ作りというようなものでして、今度の展示の場合には…
			○資料室		写真が、すでにあったのですが、

			写真を選ぶ人 (O L) ○写真５点が重なる。 T⑫BW 撮影　藤城　昭 (WIPE) ○収蔵庫 農具や漁具を、資料カードに照しあわせながらチェックしていく。 T⑬W 展示資料の確認 (WIPE) ○農道 小林さんたちが、歩いている。 T⑭W 資料の補足調査 ○ある農家 小林さんたちがやってきて、その家の高塚老人と話しはじめる。 小林「今日は、おじいさんのところに、種蒔きの道具と畔引きの鎌があると聞いたのですが、ありますでしょうか？」 高塚「はいはい、この畔をとる場合、実際にやってみせたほうが…」 T⑮W 佐原市扇島 高塚稼弍郎 ○畑 高塚老人が、作業しながら、小林さんに説明している。	11分 50秒	この写真だけではつまらない、物足りないということがあったもので、いろいろ議論がされまして、写真だけではなくて、具体的な物の資料も加えて、分かりやすい展示にしていこうといういうことが、いろいろ話しあわれました。 それで、決定後の資料調査なのですが、所在調査といったものなのですが、どこに、なにがあるかということを調べて、はっきりさせていくということになります。 そして、館内の収蔵庫の品物で足りない場合、館外に補足調査にでかけるわけです。
	鳥の声				

			高塚「こういう風に切って、万能の幅だけ切っていくと、こんだこうして、ばっさりばっさり仕事がはかどるわけ」(WIPE)		
			○学芸課の室内 ・アンケート整理を進める学芸員 T⑮AW 写真の選定 ・図録の編集をする学芸員 T⑮BW 図録の編集 ・アンケートの整理をする学芸員 T⑮CW ・アンケートの集計		こうして、展示品が決まったところで、館内にある膨大な量の写真資料の中から、展示のテーマにふさわしい作品を選定する作業に入ります。 また、平行して企画展示のための図録の編集なども、学芸員が手分けをして行います。 そしてさらに、今回は、農機具、耕作機といったようなものが、いつ頃から入ってきたとか、テレビとか洗濯機、冷蔵庫といった昔の3種の神器といわれているようなものですけど、そういったものがいつ頃から入ってきたかということを詳しく調べてみようということで、この地域の方々にアンケート調査をお願いして、その結果を展示に反映させようと試みたわけです。
			○イラストA 展示にいたるまで―画面接写・パン		こうして、いろいろ揃いまして、構成案の作成ということになっていきます。先程言いましたイメージ作りが、より具体化してくるという段階になってきます。そして、大まかな構成が組立てられていくということになります。そして、予算要求、これもまあ、1年前なのですが、構成案にもとづいて、いろいろな予算を要求していって、この予算が通った段階で、いよいよ本格的な展示に

			(WIPE)	14分 34秒	入っていくということになります。そして、その後は、さらに調査を加えまして、足りないものがあれば補充していって、さらに精度を高めていくというようになっていきます。
		5	展示の実施計画と実際		(12分8秒)
			○学芸課の室内 出陳一覧表をもとに、展示会場のレイアウトの検討などが行われている。 T⑯W 実施計画の検討 小林「今度の展示の資料配置図をもってきたのですが、これでいろいろ検討してもらいたいのですが…」 伊豆「真ん中にあるザッパ船だけど、入るのかな？」 石井「サイズは、どの位？」 小林「幅が1メーター12で、こっちの長さが5メーター40位。ひとつ目を引くところになるのじゃないかと思っているのですが…」 伊豆「もともと使っていたものだから、載せることは問題ないですね」 石井「むしろ、あったほうが、こうしてね。写真で補強したほうが、もっとよいものが…」		

			写真に近づいていって― (WIPE) ・カメラに向かって、語り続ける小林学芸員 ○展示資料配置図 コーナーの①へ近寄っていって― ○説明図 ①「水郷のうつりかわり」の内容 古文書、絵図・地図、航空写真など。 ○展示資料配置図 コーナーの②へ近寄っていって― ○説明図 ②「水とともに」の内容。 水害史年表、水害・水利関係写真、家屋形態(水屋)写真、水神社分布図、水神ビシャ写真、河童関係資料など。 ○展示資料配置図 コーナーの③へ近寄っ	15分 28秒	今回の展示は、昭和30年代を扱ってみようということで始まったわけですけど、また、ここ40年くらいのことなんですがそれが、非常に大きく変わってしまったと我々大人でも分からなくなってしまって、とまどうことがあるのですけど、そういうことを細かく追っていって、子供でも分かる展示にしようというのが、大きなねらいの一つです。 それで、そういうものが、どうしたら分かってもらえるかということで、今回は、五つのコーナーを設けまして… まず最初に、〈水郷のうつりかわり〉というコーナーを設けました。これは、いってみれば、歴史的な経緯を示す部分なんですが、この辺りは、近世の新田開発で、新たに出来た土地でして、沼地のようだったところを埋め立てて陸地化していったと、そういうようなところです。 二番目は、〈水とともに〉ということでこれは、環境を表すようなコーナーにしようということで、この辺りでよく祀られている水神様というのがあるのですが、それを主として環境を分かってもらえるコーナーにしようということです。

			ていって― ○説明図 ③「米作り」の内容 生活写真（多くは昭和30年代のもの）、農具・漁具・サッパ舟・生活用具等の実物資料など。 ○展示資料配置図 コーナーの④へ近寄っていって―		そして、三番目は〈米作り〉といいまして、これはまあ、そうした歴史的な流れですとか環境をふまえたうえで、それでは、どうして暮らしてきたのかということでいわば、主たる生業の部分を展示してみました。
			○説明図 ④「かわりゆく水郷」の内容 事業関係資料、事業関係写真など。 ○展示資料配置図 コーナー⑤へ近寄っていって―		そして、四番目。〈変わりゆく水郷〉ということで、当地の環境を景観ごと大きく変えた土地改良事業というのがあるのですが、それによって、今まで水郷と呼ばれていた舟を使った生活というのがなくなって、道路化され、大型機械が導入されてくるという風に大きく変わった時期なのですが、そうした部分が分かるということで、そういうコーナーを設けました。
			○説明図 ⑤「時代をこえて」の内容 変革期以後の生活写真、農機具・生活用具等の実物資料、生活史年表（近代）、グラフなど。 （WIPE） ○川辺の道 博物館の車が走っていく T⑰W 資料の借用 （WIPE） ○高塚さんの家	18分 31秒	そして最後に、全国的に起きた高度成長期という時期なんですが、… 最後に、時代を越えて、電気とかガスとか水道、そういったものから生まれてくる電化製品といったものを、併せて展示してみて、しめくくったということになります。 開催日が間近になると、あらかじめ、補足調査に出かけるわけです。
		車の音 船の音			

			・展示する農具が積み込まれていく。 ・高塚さんに、預り証を渡す小林さん ・車に乗り込む小林さん (WIPE)		借用する資料については、かならず、預かり証を用意します。これも、忘れてはならない大切な手続きの一つです。
			○イラストB 資料の受け入れ—全景から接写へ (WIPE)		資料の受け入れは、大きく寄付、購入、寄託、借用の四種類に分かれます。寄付、購入の場合は、資料の所有権は博物館に移りますが、寄託、借用は所有者の依頼を受けて資料を保管し、また博物館で必要な資料を一定期間借り受ける場合をいいます。今回の場合は、企画展示のために資料の借用をしました。この後、借用した資料は、館に持ち帰って、展示のための作業に移ります。
		作業音 水音	○博物館・内部 ・借用品の解梱 ・資料の水洗い		博物館に運び込んだ資料は、まず、荷解きをします。 それから、場合によっては、資料の洗浄をしたり壊れた部分の補修を行います。
		機械音	・燻蒸室 燻蒸を済ませた資料を運び出す。 (WIPE) ・展示室 設置作業のようす		そして次に、燻蒸室に入れて、害虫などの駆除をします。このような過程を経て収蔵庫に保管し、展示場に移していくわけです。
			T⑲W 展示資料の設置・すり合わせ		このような一連の作業を経て、必要な資料を展示場に移します。展示の意図を具体的な図面に書き表した配置図を作り、それに沿って、集めた資料を設置していきます。ところが、頭の中で考えていたことと、実際にものを置いてみた場合では、微妙に異なる場合があります。そこで、現場でその調整をしていきます。これを、資料のすり合わせといいます。

					これは、企画の段階から考えていた、展示のイメージに近づけていくための大事な作業なんです。
			検討を重ねながら、配置し、名札を置いていく。		こうして、資料の配置が済み、展示の流れが見えたところで、資料説明のためのネームプレートやキャプションを置いていきます。これらは、見学者が展示物を理解するための手助けになります。ですから、見学者が、見やすい場所に、見やすい角度で置くという配慮が必要になります。
			(WIPE) ○イラストC 展示作業の流れ—		それでは、ここで展示作業の流れについて、まとめてみたいと思います。資料の設置、すり合わせ、キャプションやネームプレートの設置後、展示資料を保護するために防虫剤、調湿剤、温湿度計等を展示ケースの中に設置し、また見学者がよりよい条件の中で見学できるように照明の調整を行います。そして、内部解説会を経て、開館となるのです」
			(WIPE) ○博物館・外景 企画展示のタイトルの書かれた看板がかかっている。	23分 9秒	
M3			○同・内部 ・導入路 壁面に、多くの写真がかけられた廊下を辿っていって— ・企画展示室 その全景—		**N**「こうして、五年にわたる学芸員たちの調査研究活動の結晶ともいえる企画展示《父ちゃん母ちゃんが子供だった頃　昭和30年代—水郷の風景》が完成した。
			T⑲W 完成した企画展示 ○展示室の図解 浮かんでは消える。 ・第一コーナー		企画展示室には、企画のテーマが5つのコーナーに分けて展示されている。 第一のコーナー、水郷の移り変わ

		T⑳W 1 水郷のうつりかわり 第二コーナー T21W 2 水とともに T22W 水神様 T23W なまず料理 ・第三コーナー T24W 3 米つくり ・第四コーナー T25W 4 かわりゆく水郷 T26W 土地改良関係資料 ・第五コーナー T27W 5 時代を越えて (MIPE)	26分 42秒	り。江戸時代以来の歴史や地理的な変遷のようすが、古文書や絵図、地図、航空写真などによって表現されている。 第二のコーナー、水とともに。水とともにあった水郷の生活環境が、水害史年表、水害や水利関係の写真、生活用具の模型などによって表されている。 第三のコーナー、米作り。水郷の湿田の米作りのようすを、写真や農具、生活用具などの実物資料を利用して、人力を中心としたものと、機械化を中心としたものとに分けて展示し、過渡期である昭和30年代の特徴が浮かび上がるように工夫されている。 第四のコーナー、変わりゆく水郷。ここでは、事業関係の写真や資料などによって、水郷地帯に一大変化をもたらして土地改良事業の概要が描かれている。 そして、生活写真や生活用具などの実物資料によって、高度成長期以後の水郷の生活状況を示した第五のコーナー、時代を越えて。こうして、5つのコーナーが、それを順番に見ることによって、父ちゃん母ちゃんが子供だった・昭和30年代の水郷のようすを、生き生きと把握出来るようにと配置されたのだった」
	6	エピローグ		(1分58秒)
		・展示コーナーの前で話		**田村先生の話**「展示の立案から、実

			しかける田村先生 その姿に、次々に写真が重なっていく。 ○バードウォッチングの写真 ○歴史探訪の写真 ○講演会の写真 ○実習風景の写真 ○研修会の写真 ・話し続ける田村先生 (WIPE)		施に至るまでの過程を見てきました。これによって展示が、学芸員の日常の調査や研究活動と、非常に密接なつながりをもっているということが、よくお分かり戴けたことかと思います。この博物館の展示というのは、大変大事な仕事で、社会との接点になる大事なものですが、学芸員の仕事、博物館の仕事というのは、それだけに終わるものではない。 それ以外に、バードウォッチングなどの自然観察であるとか… 歴史や古墳の探訪であるとか、民俗調査であるとかいったようなことを… 友の会とか同好会といったようなものを組織して、そうした人達と一緒に行う… あるいは、伝統的な技術や知識そういったものを実演・実習する… そのことによって博物館のもっている社会教育施設、あるいは、教育施設としての役割・任務、そういうものが果たされていく、その中核としての学芸員、そういう自覚をもって、毎日の仕事をしてほしい。そう思います」
		7	終了タイトル		(1分)
M4			○水郷風景の上に重なっていって― T29W 有形民俗資料 第三部　展示 T30W		

武蔵野美術大学教授
田村善次郎
T30W
千葉県立大利根博物館
館長　　栗本佳弘
学芸課長　石井勝也
T31W
学芸員　伊豆守彦
　　小林　稔
　　米谷　博
T32W
協力
高塚稼弍郎さん
千葉県立大利根博物館
T33W
学部教育教材作成
研究会委員
国立歴史民俗博物館
教授　朝岡康二
国学院大学
教授　倉林正次
横須賀市自然・人文
博物館
館長　田辺　悟
T34W
武蔵野美術大学
教授　田村善次郎
成城大学
助教授　山口　徹
T35W
放送教育開発センター
教授　　川島淳一
教授　　福井康雄
助教授　須藤　護
助手　　芝崎順司
T36W
制作協力
NHKエデュケーショナル

			T37W T37W 制作 放送教育開発センター （大学共同利用機関） T38W 学部教育教材 博物館学芸員の仕事 第三部　展示 終 （画面溶暗）	29分 40秒	